○アジアに於ける麥作伝播の方向（藤田安二）　Yasuji FUJITA: Propagation routes of barley and wheat in Asia.

大麦 *Hordeum vulgare* Linn. の起源は中国西部山地だと考えられていたけれども[1]，最近生沼氏[2] は核型分析其の他より，その発祥地を Hindu-Kush 及びその近接地域であると推定された。中国西部は恐らくその二次中心であろう。著者は前報[3] に引き続き，その呼称の言語的類縁関係より麦作伝播の方向を推知せんとするものである。

印度には Yava なる穀物又は大麦を示す極めて古い言葉があり，Sanskrit にては大麦を Yava, Yavaka, Yuva と言い，Hindu にては Jav, Jau, Jawa と言う。Bengal にても Juba, Jab と言い，Punjab にては Jawa, Jau, Afganistan にては Jav, Jao と言う。Marathi にては Java, Jav; Guzerat にては Jau, Jav; Telugu にては Yava, Yavaka; Kanella にては Jave-godhi と言う[4) 5)]。

Iran にても Jav と言い，Iraq にては Jau, Kurdistan にては Jū と言う[6)]。バルチック海に近い Lithuania では一般穀類を示す語として Java, Javi が残存する[7)]。

この事により大麦の起源地を中心として Java 系の極めて古い言葉が広く分布している事が分る。なお西藏の Lassa にては大麦を Soah と言い，Bhotan にては Nas と言い，Nepal にては Tosa と言う[8)]。Java 系とは全く関係がない。

一方中国では古代より大麦を牟 Mou と言う。朝鮮では大麦を Pori と言うが又中国の牟より来た Mu もある[10)]。我国のムギは本草和名には牟岐と書くが，中国の Mu より来り Mu に gi を加えてムギと呼ぶものであろう。

アイヌは大麦を Mungi, Menguro, Menkuro と呼ぶが[11)]，Mungi は日本語の Mugi から出たものであり，更に Menguro, Menkuro は Mungi+ro より Menguro となり，次に Menkuro となつたものと思われる。即ち我国への麦の伝播は中国を通じてである事は間違ない[12)]。

さてビルマにては大麦を Mu-yau と言うが[13)]，Mu は中国の Mu に一致し，Yau は印度系の Jau に一致する。恐らくビルマは中国からと印度からとの集束地点をなすもので，この事はビルマへは中国から大麦が伝つた事を示すものであろう。

かくしてアジアに於ける大麦の呼称の分布には Java 系と Mu 系との全く異なる二大系統が存在する事が分る。これはそれぞれ大麦の発祥地としての Hindu-Kush 系とその二次中心なる中国系とに相当する。然してこの事はこの両系統の発現が共に極めて古い事を示すものである[14)]。

この外興味あるのはトルコにては大麦を Arpa[15)] と言うが，洪牙利にても Arpa[16)] と言い，又トルコにては大麦を Shair[17)] とも言うが，Arabia にても Shair[18)], Sheeer[19)] と言う事であり，後者は米の Shali と同系の言葉であつて，Tamil にては大麦を Barli-arisi[20)] と言うが，Arisi は同様米を示す言葉である。

次に小麦 *Triticum aestivum* Linn. (*T. vulgare* Vill., *T. sativum* Lam.) も亦オ

リエントの起源であるが，Sanskrit にては Godhooma, Godhuma と言い，Persia にては Gundum, Gandum と言い[21]，Afganistan にても Gandum[22] と言う，Malay にても Persia 語より入つた Gandum, Gendum が用いられる[23]。

この Sanskrit[24] の祖型として著者は印度先住民族語としての Tamil の Godumai, Telugu の Godumulu を考えるが，又 Bengal の Gom, Gam もこの系統であり，Kanella の Godhi は語尾の m が除かれたものである[25]。又 Hiudu の Gehun, Marathi の Gahun, Guzerat の Ghavum も勿論この系統に属する変形である[25]。

然るに中国にては古くから小麦は Mai 又は Lai と言う。Lai (来) と言うのはよそから来たからだとも言うが[9]，Mai は印度に於ける Sanskrit の Godhuma の祖型と考えられる Dravida 系の Tamil 語の Godumai の Mai から来たものと考えるのははたして不合理であろうか。即ち著者は中国の小麦は一方に於て印度を通じて来たものと考えるものである。

この点で一層興味あるのは朝鮮に於て小麦を示す Mil である[26]。これは同様 Telugu 語の Godu-mulu の mulu に合致する。即ち朝鮮の小麦 Mil は印度に於ける同じく Dravida 系の Telugu 語に連関するものと考えられるのである[27]。

然らば北方に於ける小麦の呼称はどうであろうか。蒙古語にては小麦を Bogtai と言うが[28]，トルコ語にても Bugday と言う[29]。全く同一形である。又ハンガリーにては小麦を Buza と言うが[30]，これも明かに同系に属する[31]。更に東ツングース語中オロッコ語及びサンダ語で米，粟其の他穀物をすべて Buda[32] と言うのも同系であつて，ここに北方中央アジアを通つた Bug, Buz 系の小麦の伝播経路が明かに示される。中国に於ける麦の別音 Bŭk も確かにこの北方よりの系統に属するものと考えられる[33]。即ち中国への小麦の伝播には南方及び北方の両系がある事が分るのである。

文 献 及 び 註

1) Vavilov: Origin, Variation, Immunity, Breeding Cult. Pt., **1951** (Chron. Bot., **13**, no. 1～6 (1949～50)), 21; 北村: 東方学報 (京都), **19**, 82 (1950). 2) 生沼: 科学, **22**, 301 (1952); 植物学雑誌, **66**, 28 (1953). 3) 藤田: 植研誌, **27**, 223, 290 (1952); 香料, **22**, 11 (1952); **27**, 34 (1953). 4) Roxburgh: Flora Indica, 120 (1874); Watt: Dic. Econ. Prod. Ind., IV, 275 (1890); Dymock, Warden, Hooper: Pharmacogn. Ind. **3**, 615 (1892); Kirtikar, Basu: Ind. Medic. Pl., 1380 (1918). 5) Kanella の Jave-godhi の Godhi は後述の如く小麦を示すものである。 6) Hooper, Field: Useful pl. Drug. Iran, Iraq., (Field Museum. Nat. Hist., **9**, no. 3), 126 (1937). 7) 藤田: 香料, **22**, 11 (1952); 杉: 駒井編, 考古学概説, 491 (1951). 8) Watt: l. c. 9) Bretschneider: Bot. Sin., **2**, 143 (1892). 10) 柿原: 日韓いろは辞典, 236 (1907); 村田: 満鮮植物字彙, 55

(1934); 小倉: 朝鮮語方言の研究, 上, 208 (1944). 11) 宮部: 植研誌, **24**, 3 (1949); 知里: 分類アイヌ語辞典, 植物篇, 225 (1953). 12) 小野: 日本農業起源論, 72 (1942) 参照。 13) Watt: l. c.; Kirtikar, Basu: l. c. 14) 高橋, 山本 (農学研究, **39**, no. 3, 4 (1951)) は大麦の起源の二元説に賛成する。 15) Watt: l. c., Hooper, Field: l. c.; 日土協会: 日土, 土日大辞典, 204 (1936); Bedevian: Ill. Polyglot. Dic. Pl. Names, 321 (1936). 16) 今岡: 洪牙利語小辞典, 96 (1943). 17) Hooper, Field: l. c. 18) Watt: l. c.; Kirtikar, Basu: l. c.; Bedevian: l. c. 19) Roxburgh: l. c. 20) Kirtikar, Basu: l. c. 21) Roxburgh: l. c., 120; Watt: Dic. Econ. Prod. Ind., VI, **4**, 89 (1893); Hooper, Field: l. c., 181. 22) Watt: l. c., VI, **4**, 89 (1893). 23) Watt: l. c., VI, **4**, 89 (1893); Burkill: Dic. Econ. Prod. Malay Penn., 2188 (1935). 24) Sanskrit には Godhuma の外に **Saman** (Watt: l. c., VI, **4**, 89 (1893)) と言う言葉があるが, これは米の Aman と明かに同系であり, Sanskrit への借用語として極めて注目すべき言葉である。 25) Dymock, Warden, Hooper: l. c., **3**, 607 (1892); Watt: l. c., VI, **4**, 89 (1893). 26) 柿原: l. c., 305 (1907); 森: 朝鮮植物名彙, 56 (1922); 村田: l. c., 95 (1934). 27) この朝鮮語と Dravida 語との関係に就いては更に Hulbert: Comparative grammer of the Korean language and the Dravidian language of India, **1905**, (Seoul 発行) なる興味ある論文がある。 28) 陸軍省: 蒙古語大辞典, 下, 290 (1934). 29) Bedevian: l. c., 595 (1936); 日土協会: 日土, 土日大辞典, 204 (1936). 30) 今岡: 洪牙利語小辞典, 84 (1943). 31) 又 Punjab にてはマグサとしての大麦を特に Buza とも呼ぶが (Watt: l. c., IV, 275 (1890); Kirtikar, Basu: l. c.), これは北よりの移入を示すものであろう。 32) 中目: オロッコ文典, 99, 161 (1917). 33) 更に Arabia にては小麦を Burr と言うが (Roxburgh: l. c.), Egypt にても Br と言う (de Candolle 植物の起源 (加茂訳), 650 (1941))。

(大阪工業技術試験所精油研究室)

□檜山庫三: **武蔵野植物記** (pp. 192, pl. 4+53, 内田老鶴圃, 1953 年 12 月 ¥ 320)

東京に住む植物学者は多いが, 武蔵野に蟠居するといえる学者は少い。著者は本書の中心をなす第 2 章武蔵の植物相及び第 3 章武蔵野植物の変遷 (pp. 7-69) でこの地の植物に無限の愛着を示しつつ, 人文と自然環境の歴史を探り, これに裏付けられた現在の植物相を立地別に大観した。その他, 生品から写生された図版或は写真がついた 54 種の植物の説明, 採集地案内, スミレ, タデ, スゲ属 の検索表など。武蔵野 を故郷としない人々のため, 少くとも本文中に出てくる地名はすべて表紙裏の地図に記入されることが望ましかつた。 (津山　尚)